

2023年 2月 国際放送番組審議会

2023年2月のNHK国際放送番組審議会（第699回）は21日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で6人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Dive in Tokyo」Yanaka – Building on the Past、「NHK WORLD PRIME」OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON – Islands at Odds with Peace & Security – について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	永井 均	（歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授）
副委員長	阪田 恭代	（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 教授）
委員	遠藤 乾	（国際政治学者、東京大学大学院法学政治学研究科 教授）
委員	坂野 晶	（一般社団法人ゼロ・ウェイスト・ジャパン 代表理事）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、神奈川大学理学部生物科学科 教授）
委員	杉山 晋輔	（早稲田大学 特命教授、前駐米大使）

（主な発言）

<最近の国際放送の動きについて>

- 日本のウクライナ避難民を支援するロシア人親子の記事を、ウクライナ語でNHKワールド JAPANのサイトに掲載、SNSで周知したところ、ヨーロッパを中心に 900を超えるコメントが寄せられたと報告があった。この記事とコメントをきっかけに、新たに小さなコミュニティーができたということで、非常に興味深い。この記事とコメントは一般視聴者も見られるのか。また、2023 年度国際放送番組編成計画で「Kids Edutainment」の新設が紹介されていた。新たに教育番組に力を入れるという方針の実現だと思うが、これについては周知活動が重要だ。インターナショナルスクールや外国人の生徒を抱える国内の小・中学校へは働きかけているか。

（NHK側） この記事はNHKワールド JAPANサイトのウクライナ語ページに掲載しており、英語化もしている。コメントは、周知のためのSNS投稿に対するもので、一般視聴者には公開していない。

（NHK側） 「Kids Edutainment」の周知方法については、今、検討しているところだ。まずは英語で放送し、その後多言語化してVODで配信したいと思っている。国内のインターナショナルスクールなどへの周知や、教育関連機関にも情報共有しようと検討しているところだ。

< 「Dive in Tokyo」 Yanaka — Building on the Past

(6月29日 (水) 9:30 ほか)

「NHK WORLD PRIME」 OKINAWA'S RETURN:

50 YEARS ON — Islands at Odds with Peace & Security —

(12月17日 (土) 10:10 ほか)

について>

- 2番組とも興味深く見た。「Dive in Tokyo」はクラシックな作りで、外国人の視点から見た谷中を紹介する番組だが、江戸から現在までの時間の推移を縦糸に、地域を支え続ける共同体の人々や営みを横糸におく、多面的なアプローチが新鮮で厚みのある番組だという印象を持った。また、共同体をまとめるファシリテーター的役割を持つ人が紹介されていて、例えば、民家を人が集う新しい場に作り替える建築家は、街にとって重要な存在だと思った。また、谷中を特徴づけている寺や、かつてそこに存在した川、その川を利用した染め物、昔からの味や古い家などを見ていくと人々の営みが生き生きと見えてきて、好感が持てた。こうした番組の価値は長くもつと思うので長い間楽しんでもらえるのではないかな。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON — Islands at Odds with Peace & Security —」は、安全保障をテーマにした番組にありがちな、ニュース的、客観的で抽象的な表現、東京を主体とする見方から離れ、地方の視点で厚みを持って描かれている点が良い。安全保障の論理という形で具体的に地域に押し寄せる、少し残酷ともいえる現実を描いていると感じた。主人公の若者は、純粋に地元の人を助けたい、災害支援をしたいという目的で自衛隊に入隊するが、結果的に戦闘訓練を経て、銃を持ち、人を殺めるかもしれない存在へと変わっていく。その残酷な転換を映像化した番組だ。おそらく比較相対的に貧しいであろう基地周辺の人たちから、国防への忠誠を引き出す様が、静かに残酷に描かれていた。関連して、自衛隊に入隊する人たちの社会階層などが説明されればさらによかった。地場産業が少ない沖縄では、高卒の場合、自衛隊が相対的に魅力的な就職先だ。地元は地元で守るべき、といった論があることも、地域の抱える現実だ。番組では、沖縄ならではの、若者と祖母の世代の戦争観の違いもよく見えたと思う。

- この2番組は、いずれも国際放送に加え、日本人視聴者にも見せるべきだと感じた。「Dive in Tokyo」で掘り下げたのは谷中だが、以前から、日本人よりも外国人に人気がある場所だ。歴史があり、静かで落ち着いた町の風情と人々が好ましい、魅力的な地域で、安く美味しい食事ができる場所でもある。日本人にもここのようなよさに気づいてほしい。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON — Islands at Odds with Peace & Security —」も日本の若い人に見せる価値がある番組だ。沖縄と自衛隊、安保・防衛、領域主権などは、中立性を持って描くのはハードルの高い話題だが、バランスを取ってよく描けていると思った。自衛隊に志願した若い男性が、両親や祖母からかけられたことばには世代の違いを感じることができた。災害支援のために入隊を希望したが、

任務の1つとして法律上規定される、本土防衛の使命に直面する若者の、素直な反応がよく捉えられており、見る者の心に響く。また、返還時の元沖縄県知事、屋良朝苗氏の話などを通じて、沖縄の歴史や苦悩も描かれ、本土復帰50周年を経た今、時宜にかなう、意味のある番組だと思った。

○ 「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security -」は、非常に価値の高い番組だが、出演者に対し、その後インターネットなどでネガティブな反応はなかったか気になった。特に国内で放送された場合に、そのようなリスクはないのか聞きたい。この番組を見て、各地域の課題の中に、地域の中に留まり、外部に知られないままのものも、まだまだあるのだろうとも考えた。また、番組の中で、沖縄以外の外部からの視点、例えば沖縄以外の地域の出身者（赴任して仕事をしている人など）の住民の視点も取材すると、さらに複合的に掘り下げることになり、客観的な厚みが増したかとも思う。「Dive in Tokyo」は、東京の持つ表面的なイメージを、さらに掘り下げようという趣旨で大変よい内容だ。東京は、大変キャッチーで魅力的なテーマだが、今後、ほかの地域で、その場所が持つイメージを覆すような、例えば意外にもデジタル最先端が地域に存在するなどのストーリーを発掘する番組ができるとうれしかった。

○ 「Dive in Tokyo」は大変楽しい番組だった。東京の下町では、空襲で焼けなかった場所に古い建物が残っているが、市民の生活で使われ続けており、昔の生活が今に引き継がれている。観光用に造られた人工的な江戸時代の街とは異なる、そうした営みや風景が大変よく描かれていた。画面上の地図の表示は、土地勘のない視聴者には分かりにくく、歩いたルートが分かるような図にするなど、もう少し工夫があればよかった。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security -」は、沖縄の抱える課題を考えさせられる重い番組だった。沖縄のほか、北海道でも自衛隊は普通の就職先として捉えられるが、首都圏の高校生や大学生で、将来の進路として自衛隊を挙げる学生はほとんどおらず、選択肢として存在しない印象だ。沖縄では、就職先が限られていることも影響しているのかと思う。番組の中で、もう少し社会的なバックグラウンドや、就職の選択肢などについても触れる機会があればよかった。

○ 「Dive in Tokyo」は、外国人観光客に、東京のローカルに入ることで街の魅力を発見してもらえるよい番組だ。谷中は魅力的な場所の1つでよい選択だ。たとえばパリでも、さまざまな地区を周る人が多いが、同じように東京のローカルの魅力をさらにディープに見せるのは効果的だ。単なる観光情報ではなく、その地区の人、暮らしや文化など、日本社会の一端を描いていることが魅力的に映る。副題の「Build on the Past」のとおり、伝統を生かしてモダンに暮らす、ジャパニーズモダンなライフスタイルが紹介されている。英語を母語としない外国人も見るので、英語音声の部分にも字幕を出した方が親切ではないか。ナビゲーターのゼガさんは、シーンの合間で英語でも興味深いコメントをしているが、それが伝わらないのは残念だ。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace &

Security ー」は、沖縄の復帰50周年にあたり、重いテーマに挑んだ番組で、考えさせられる内容だった。アジアにおける安全保障で注目されるのが台湾海峡だが、最前線の1つである沖縄も緊迫した状況の下におかれている。その沖縄の視点が描かれたことに意義がある。また、日本人の若者2人の、戦争と平和の中で葛藤する視点が描かれたことも重要だ。日本は国家安全保障戦略を採択して防衛力を増強しており、一部の外国メディアは、日本が軍国主義に回帰しているという単純化されたイメージを発しているが、厳しい安保環境下で日本がジレンマを抱えていることが正しく伝わっている。副題の英語はやや分かりにくい。「at Odds with Peace & Security」は、平和とも、安保とも葛藤があり両方拒絶しているニュアンスになる。日本語のタイトル、「誰が島を守るのか〜若き自衛隊員の葛藤〜」の「葛藤（ジレンマ）」を活かしたタイトルにした方が内容が伝わるのではないか。さらにこの番組は若い世代にとって大事なテーマなので、若い視聴者にアウトリーチするには衛星放送よりも地上波での放送、あるいは動画共有サイトでの公開を検討した方がよいのではないか。

- 「Dive in Tokyo」は、短編ながら充実した内容で、視聴者を飽きさせない仕掛けが随所に見られた。「寺」「川」「愛」という3つのキーワードから谷中を読み解くことは視聴者の探求心を刺激し、番組進行において効果的だった。外国人視聴者に東京の知られざる魅力を伝えるだけでなく、日本の視聴者にも東京を再発見させる、今後、期待が持てる番組だと感じた。ナビゲーターのゼガさんは、案内が自然で、あたかも一緒に谷中の街を歩いているような気分させてくれる、適任の案内役だ。既にパイロット版として谷中のほか、蔵前や豊洲などのエピソードが作られているが、場所選びは、どのような基準によるもので、新年度からはどの辺りの地区が候補に挙がっているのか。可能な範囲で教えてほしい。また、日本語版を制作する予定はないのか。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security ー」は、沖縄返還50年という節目に、沖縄駐留の自衛隊や平和と安全保障を取り上げ、沖縄の声を日本の内外に届けた、時宜にかなった内容だと思った。沖縄の市民と自衛隊との関係を巡る過去と現在が、沖縄出身の若き自衛官とその家族の目線で描かれている点が特徴だ。現在進行形の非常にデリケートな問題を扱っているにも関わらず、かなり踏み込んだ取材が実現したのは、素晴らしい。World News部が地元の沖縄局と連携し取材対象者の信頼をも得て、自衛官とその家族に密着取材できたことによるものだと思う。かなりチャレンジングな取材だったと思うが、取材時にぶつかった壁、困難などがあれば、可能な範囲で教えてほしい。また、英語版のタイトルと日本語版のタイトルが異なることには何か理由や狙いがあるのか。さらに、英語版と日本語版への視聴者の反応について、分かる範囲で教えてほしい。

- 「Dive in Tokyo」は、これまで知らなかった谷中の魅力に気付き、東京の持つ新たな魅力を認識できた。歴史的建造物や日本家屋のカフェやギャラリーへの転用、街並みを保存しようとする人々の地元への愛は、日本文化に関心のある外国人の琴線に触れたのではないか。ただ、谷中を京都の風情に例えた箇所については、京都の二番煎じと受け取られかねないので、むしろ京都以外にも多くの魅力ある街や文化があることを訴えるべきではないかと思った。目の肥えたりピーターの要求に応えるためにも、谷中以外の日本の地域を対象に、同様な番組を届けることが有効だ。古い家屋を

ギャラリーカフェに造り替えた建築家の宮崎晃吉氏が述べていたように、地域の痕跡と歴史を大事にしていくことが、日本の魅力を高めていくことになるかと再認識した。また、歌川広重の浮世絵に描かれた諏訪の台からの風景と現在の景色との対比は印象深く、特に新幹線や在来線が並走する様子は、海外の鉄道ファンにとっても魅力的な風景だと感じた。徳川幕府について、最初は「government」、後に「shogunate」と言い換えていたのが気になった。はじめに「government or shogunate」と言い、残りを「shogunate」と統一してはどうか。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security -」は、ロシアとウクライナの戦争を契機に地政学リスクが高まる今日、日本の置かれた立ち位置がいかなるものか、海外の視聴者の理解を深める上で、質の高いよい番組だと評価する。視聴者は第二次世界大戦の惨禍を経て、平和国家に生まれ変わった日本を取り巻く国際情勢が大きく変化したこと、ロシア、中国、北朝鮮と国境を接する日本が欧州諸国と同等に切迫した問題を抱えていることを理解できたと思う。また、番組では問題が市民目線で提起されたことで、視聴者にとっても身近なものとして共有できたのではないか。沖縄の2人の若者の葛藤や、沖縄地上戦の実体験から命の尊さを説く祖母の姿には、国を超えて心を打たれる。また、訓練警報に緊張の表情を見せる与那国島の市民の姿に、戦時下のウクライナ市民を重ねて見る視聴者もいるのではないか。「誰が島の平和を守るのか」という問いへの探求が続くというラストコメントだったが、ぜひ続編を期待したい。また、ドイツが日本同様に大戦後、平和国家の道を歩み、戦前の国防軍から新しいドイツ連邦軍を組織した経緯を考えると、現在の地政学的リスクの高まりを、市民、特に若者がどのように受け止めているのかについて関心を持った。ドイツと日本を対比する試みがあってもよいかもしれない。

- 「Dive in Tokyo」について、案内役のゼガさんは本職がコメディアンで、ユーモアを交えた進行が番組のトーンを明るくしていて好印象だった。外国人にとって浅草などの観光地はなじみ深いのが、谷中の情報は比較的少ないので、このようないわば穴場的な場所を紹介することの意味は大きく、歴史的背景や人々の生活を垣間見る部分など、バランスよく仕上がっていた。ただ、シャッター街の風景は、外国人の視聴者に衰退した下町という負の印象を与えた可能性もあると思う。多少、説明を加えてもよかったのではないか。

「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security -」は、沖縄返還50年の歴史を、戦争を知らない若い世代の自衛隊員の視点を通して描く、クオリティーの高いドキュメンタリー作品だ。歴史的な映像や戦争を経験した高齢者のことばも交えることで、沖縄の過去と現在が交差し、見応えのある番組だった。中国・台湾有事、北朝鮮からのミサイル、ウクライナ戦争という地政学リスクの高まりを多くの人たちが体感しているタイミングで、このような番組を放送する意味は大きいと思う。

- (NHK側) 「Dive in Tokyo」は、2023年度の定時番組化を目指して、今年度、2022年度に蔵前、谷中、神田川、豊洲という4本のパイロット番組を制作し、さまざまな演出スタイルを試しながら取り組んできた。最近、動画共有サイトで番組を公開したところ、公開してすぐに再生が増え、中でも

神田川の回は特に反響が大きかった。あらためて東京への関心が高いのだと感じた。海外のモニターからは、「東京にこのような場所があったことにすごく驚いた」「番組をゆったりしたペースで見られた」「コミュニティーの歴史が分かっておもしろかった」というような、好意的な意見があった。日本国内の視聴者にも興味深く見てもらえる番組ではないかと思うので、国内放送の可能性も検討していきたい。ほかの地域でも、類似の企画が考えられるとよいとも考えている。地図はこれから出し方を工夫していくべき部分で、東京を知らない人にも視覚的な助けになるよう、検討していきたい。場所の選択について、コロナ前から観光で訪れる人が多く、親しみがあると思われる場所を選んでいる。また、知られていなくても、訪問して発見がある場所も発掘していきたい。

(NHK側) この新番組では、東京の知られざる魅力を多くの方に知ってもらおうという、責任を担っていると感じており、今後も気を引き締めて制作に当たっていききたい。

(NHK側) 英語字幕について指摘があったが、現在一部の番組で、英語のトランスクリプトをつけるサービスを試行している。新年度からはオンデマンドサービスの全ての番組について、オプションとしてボタンをクリックすると、字幕が出てくるといったサービスが付加される予定だ。

(NHK側) 「OKINAWA'S RETURN: 50 YEARS ON - Islands at Odds with Peace & Security」は、英語で2回、30分版と49分版を放送し、日本語でその30分版と49分版をBS1でも放送した。インターネットでは、賛否両論、いろいろな反響があった。ただし、出演者を誹謗中傷するような声は見当たらず、英語放送でも日本語放送でも「若い人たちに共感する」、「祖母との会話がものすごく心にしみる」や「日本や沖縄の状況がよく分かった」という好評意見を多く得ている。

(NHK側) 沖縄で34年前に自衛隊を取材して以来、現在まで記者として自衛隊取材を継続している。復帰50年に当たり、沖縄で自衛隊がどのように変わっているのかという問題意識で取材を希望した。以前の取材でつながった自衛官を通してアプローチし、許諾を得ることができた。新隊員の密着取材は沖縄では初めてのことであったが、親が自衛官ではなく自分の意志で入隊した隊員を紹介してほしいというリクエストが受け入れられ、内定式の日から取材をスタートして、一年間密着した。家族の取材についても、取材の中で沖縄戦の経験者である祖母や、台湾出身の母親につながることができ、特に大きな壁を感じることはなかった。沖縄では、自衛隊に対するネガティブなイメージがあるので、密着取材への懸念が示されるのではないかと思ったが、そのようなことはなく、沖縄局との連携で、さまざまな訓練の現場で取材を重ねることができた。緊迫する国際関係を反映し、教える側の意識も変化しており、仮想敵を明らかにした上での教育訓練や、

実地訓練が、数十年前のものと大きく変化していることも見えた。地上波での放送も、機会があればできるとよいと思う。主人公の2人については、折々に取材するなどして、続編につなげることもできるかもしれない。